

そのすぐそばに、高虎公もいたわけです。そこには文化人からお公家さんまで、いわゆる政権中枢の人脈がありました。その多彩な人脈とお付き合いすることで多くを学んでいきました。秀長が亡くなった後に大和郡山百万石は取り潰され、高虎公は抗議の意味で高野山に入りますが、その才能を惜しんだ秀吉が呼び戻して宇和島で7万石を与えるわけですね。おそらく高虎公が築いた人脈の広さが生きていたのだと思います。

市長 宇和島市長ともこの後お目に掛かりますが、そういうつながりも今の世に遺産として残していただいているのかもしれませんが。高虎公は城づくりだけではなく人づくり、要するにハードだけではなくてソフト面にも心を砕いてこられた人物だと思います。知られざる高虎公の一面など先生はたくさんご存じだと思いますが、この場でも少しお話いただけますか。

安部 やはり高虎公が人を育てたというよりは、高虎公を見て、人が育ったという感じが強いです。

それほど才能があって、人柄も良くて、志もしっかりした人でしたから。しかも自ら手本を示して「こうするんだよ」と教えられる人だった。口だけで言っても人は従わないですからね。例えば城をつくる時でも、ちゃんと自分で設計図を書いて指示しています。ここの石垣の角度は何度にする、ここにはどういう石を使いなさい、栗石(石垣の内部に積む小石)はどれぐらい使うのかなど、明確に細かく指示できる人でした。小堀遠州が名古屋城の普請奉行をしていたときなど、なかなかはかどらない工事に業を煮やした小堀遠州が、高虎公に宛てて手紙を送っています。その中に「全くこのままではどうしようもない。だから早くあなたが来て、現場で指揮を執ってくれないと、物事が解決しない」と書いています。それぐらい頼りにされる兄貴分であり、大親分であった、そういう力を持っていた人なのです。

市長 改めて高虎公の偉大さ、人物の大きさ、そして能力を感じるお話をいただきました。それでは最後に安部先生の気になる次回作についてぜひご紹介いただけませんか。

安部 実をいうと、今、家康公を主人公にした5部作に取り掛かっています。おそらく10年ぐら



いかかだと思いますが、なぜ書く気になったかという、この「下天を謀る」を執筆した中で、高虎公がいかに家康公に心服して、信頼していたかということがよく分かったんですね。家康公自身も高虎公を右腕のように頼りにして

いた。高虎公ほどの人物が心服した家康公というのは一体どんな人間だったのか、猛烈に興味湧いてき

まして、実際に家康公を書くことで自分の中の疑問を解決したいという思いで、これから10年ほど家康公の小説に取り組もうと思っているところです。

市長 なるほど。家康の内面に迫るような小説を、皆さん読みたくなったことでしょうか。私もワクワクして次回作をお待ちしたいと思います。



市長対談は津市ホームページ・市長の部屋の市長対談でもご覧いただけます。

HP 津市 市長対談

検索